

思い出す人々

西山 厚 全24回

第13回 【宮沢賢治】

ふたりの少年は、夜空を走る不思議な汽車に乗っていた。宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』。

これは、ふたりのうちのひとり、ジヨバンニの夢。もうひとりの少年カムパネルラは、現実世界では、友を助けようとして、川でおぼれて死にかけていた。

汽車にはさまざまな人が乗り込んできて、また降りていく。窓からは、真っ赤に燃えるさそりが見えた。さそり座だ。二人はさそりが燃えているわけを知る。

これまでに読んだ数限りない本のなかで、一番悲しかったのは、この本の、この場面だ。

どこまでもどこまでもいっしょに行こう。僕はもう、あのさそりのようにほんとうにみんなの幸いのためならば僕のからだなんか、百ぺん灼いてもかまわない。けれどもほんとうのさいわいはいつたい何だろう。カムパネルラ、僕たちいっしょに行こうねえ。

ジヨバンニがこう言いながらふりかえって見ましたら、そのいままでカムパネルラのすわっていた席に、もうカムパネルラの形は見えずただ黒いびろうどばかりひかっています。